

復興の先にあるもの ~ 中東欧の社会事業レポート

担当メンバー: 稲増、三坂、東、藤森

テーマ概要: 紛争等の歴史的背景から生まれる社会的課題に立ち向かう組織、人を追う

日程 & コース: Sep.12/07 チェコ(プラハ) ~ Sep.13-14/07 クロアチア(ドゥブロブニク)

目次:

- 1) 東欧における社会的課題
- 2) プラハを中心に欧州で活躍するホームレス劇団
- 3) 人生を賭けて迫害される難民を支援する
- 4) 社会的問題を世界に伝えるフォト・レポーター
- 5) アドリア海に浮かぶ世界遺産を守る
- 6) 最後に ~ 私たちに出来ること

1) 東欧における社会的課題

訪問を前に

東欧 B チームは、今回のソーシャルビジョンツアーの訪問先として、チェコ共和国(プラハ)、クロアチア(ドゥブロブニク)を中心とすることに決めた。チェコのプラハは、ヨーロッパの魔法の都、黄金の町、北のローマ、ヨーロッパの音楽学院、そして百塔の町など、数多くの称賛の言葉をいただいている美しい歴史的観光都市である。同様に、クロアチア・ドゥブロブニクは、アドリア海の真珠と呼ばれるエメラルド色の美しい海に囲まれた世界遺産の街である。

しかしながら、こうした美しい街とは裏腹に、過去の悲惨な歴史から生まれた数多くの社会的問題が潜んでいる。紛争による難民問題、歴史的遺産の破壊、そして社会主義影響下から生まれた貧困問題など、我々が住む日本とは全く違う歴史的背景からの問題がある。我々東欧 B チームは、こうした問題に立ち向かう人々や組織を直接訪問する事で、中東欧ならではの社会事情をこの目で確かめたいと思った。

2) プラハを中心に欧州で活躍するホームレス劇団

ヤコブ・バラバン氏との出会い

9月12日(水)朝の天候はくもり。少し肌寒い。チェコ共和国・プラハにて。街が昼食時の喧騒をなす前に、私たちはある一人の青年社会事業家と出会った。彼の名はヤコブ・バラバン。プラハにて、ホームレスを中心とした劇団を運営しており、数々の賞も受賞している。ホームレスたちに自立と挑戦の機会を提供している社会事業家だ。

彼とはじめてコンタクトをしたのは、その日の朝9時が初めてで、ホームページより調べた電話番号に連絡を入れ、「日本から来た。ぜひお話が聞きたい」という旨を伝えると即座に、「10時過ぎに連絡をくれ」との返答。突然のアポイント依頼でもあったために、多少の緊張をしていたが、再度連絡をくれ、というスタンスにホッと胸をなでおろすことができた。

とはいうものの、時間は限られている。プラハに滞在できるのは本日のみで、何としても彼と会って、彼そのものの人柄、思い、考え方はもちろん、中東欧における社会的事業の必要性や、社会的課題についても直接伺いたい、という思いは強かった。そこで私たちは、彼のホームページに記載のあった所在地に10時すぎに直接訪問することにした。



(バラバン氏を突撃訪問)

10時を少しすぎたあたりで、現地に着くとそこはプラハの中でも、とても華やかとはいえない少しさびしげな空気が流れる土地だった。道端には鳥の死骸が横たわっており、住居の窓には鉄格子が当たり前のようにはなつていた。少し不安にはなつたものの、約束どおり、彼に電話によってコンタクトをとり、既に到着していることを伝えた。

どのような返答があるか、少し気を揉んだが、そこは社会事業に携わっている人に共通するオープンな心持ちだろうか、あっさりと、会うことを承諾してくれて、5分後に、彼は道の向こうから、パンの袋包みをぶら下げて姿を現した。

彼の風体は、チェコの「マイケル・ムーア」とでも呼べそうな、天真爛漫さが体からにじみでているタイプの青年だった。髪は長髪。髭を蓄えており、ニットのセーターの上に黒いジャケットを羽織っていた(そう、チェコは9月といえども、このような格好でちょうどいいくらい肌寒い)。



(カフェで思いを語るバラバン氏)

突然の見知らぬ日本人の訪問にも関わらず、笑顔で近くの行きつけのカフェに我々を招いていただき、快く我々のインタビューを承諾してくれた。カフェでは、彼の活動や想いを直接耳にすることができた。実際の演劇練習は17時からだったので、残念ながら演劇の練習風景は見ることは出来なかったが、稽古場や社会復帰支援の為の小さなビジネスセンターなども見学する事ができた。

バラバン氏の思いに触れる

バラバン氏は、元々公務員、ソーシャルワーカーであり、その仕事を通じてホームレスの人々を助ける活動をはじめた。最初は小さな演劇イベントであったが、予想以上にその活動が成功、評価を受け、2001年に本格的な Ježek a čížek (Hedgehog and siskin) という劇団を立ち上げ、ホームレスの人々の社会復帰をサポートしている。また、2007年5月には、ハンガリーでの演劇フェスティバルにおいて銀賞を獲得するなど、演劇自体に対しても高い評価を得ている。バラバン氏は、演劇という手段を通して、ホームレスの人々が社会復帰へのモチベーションを得るなど、精神的な手助けをする形で社会貢献を行っている。



(ヤコブ・バラバン氏が代表を務める劇団)

<http://www.jezekacizek.cz/>



(事務所内に飾られている劇団員の写真の数々)

カフェでのインタビューの後、いくつかの稽古場や、社会復帰支援の為のビジネスセンターへ案内された。とても簡素な部屋であった。決して綺麗な稽古場とは言えない場所であり、無造作に置かれている小道具も、誰かのお古のような物ばかり。しかし、そうしたアイテムとは裏腹に、壁一面に張られた彼らの演劇の写真からは、迫力と情熱が伝わってくる。ちなみに、左側の写真の上から2番目の方は、悲しくも先日お亡くなりになられた方であるが、知的障害のハンディを乗り越え、大変素晴らしい演技をされていたそうだ。

「ここチェコでは、身体的、健康的、そしてメンタル的にディスアドバンテージを持った人がホームレスになる傾向がある。特に傾向として、40～50歳代の人、離婚した男性、身寄りの家族もなく、教育を満足に受けていない人が多い」、「政府のサポートも形だけで全く機能していない」と、バラバン氏は語る。確かに、華やかな街とは裏腹に、街角では多くのホームレスや、ハンディキャップを持つ人々を目にした事が印象的であった。

バラバン氏は、この演劇活動を通じて将来の夢を語ってくれた。一つは、この演劇や社会復帰支援のプログラムを通じて、何らかのしっかりとした形でのソーシャルビジネスを確立したいという事。二つ目は、このホームレス問題を、もっと沢山の人達に知ってもらい、支援をいただきたいという事。そして、最後にこのソーシャルビジネスを通じて、市のプロジェクト等に

対して小額でも何らかの貢献ができるようになりたいという事であった。

これまで、沢山の困難や障壁が彼の前に立ち塞がったに違いない。しかし、彼を支えているものは何か？それは、「やらなければならない事をただやっている」という、とてもシンプルではあるが、強い信念の言葉であった。

今後も彼の演劇活動は、チェコだけでなく、広い世界へ広がっていくことだろう。

まとめ～私達が考えるべきこと



(バラバン氏と共に)

私達は、演劇という誰もが考えつかない手段をもって、ホームレスの人々の社会復帰をサポートするソーシャルアントレプレナーに出会った。彼の言葉の中にもあったが、ホームレスの人々に必要なのはお金やスキルだけではなく、社会に復帰するための精神的な強さである。この演劇というソリューションは、努力からの達成感と、自分でも何かが出来るといふ、大きな自信にもつながる。

安易に募金という支援を考えるのではなく、問題の本質をしっかりと見据えて、こうした課題に立ち向かう、また支援していくことが大切だと感じた。

< 資料編 >

- ・ バラバン氏が活躍する劇団HP <http://www.jezekacizek.cz/>
- ・ チェコ共和国 オフィシャルサイト <http://www.czech.cz/en/news>

3) 人生を賭けて迫害される難民を支援する

Jana Hradilkova (ヤナ・ハラディコバ) 女史の自宅にて

バラバン氏との出会いを終えた私たちは、後述する現地のカメラマンとの電話でのやりとりを経て、一人の女性と面会する機会に恵まれた。その女性との待ち合わせ場所である、プラハから電車で30分ほど行った先の、Luka駅の前で待つと、そこへ彼女の運転する車が近づいてきた。表情豊かで、すぐに人を引き込む笑顔が魅力的な二男二女の母。化粧っけはまったくなく、飾らない人柄。その名は、ヤナ・ハラディコバ氏。



闘う社会活動家、たくましい女性戦士。でも、とてもチャーミングな方だ。

ご自宅には、ワンちゃんと一番下の女の子がお友達と。そして、プラハ中心部でカフェを営んでいる旦那

那さまが、ちょうど出勤。プラハにある「カフェ・ヤリホ」というそのお店には、ジャーナリストや社会活動家たちが夜な夜な集まる場。ヤナさんにとっても、大切な情報&人的ネットワークの場であることは間違いない。

ヤナさんは、アショカ財団のチェコの代表を8年務めたときのネットワークで、チェチェン問題の具体的な解決のため地下組織的な活動をスタート。それを本格化させたのが、「BERKAT」。NGOへの正式登録は2001年だが、1999年から活動をスタートしている。BERKAT代表であり、そして Gender Study の第一人者でもある。チェコ・プロジェクト、チェチェン・プロジェクト、アフガニスタン・プロジェクトの総責任者として、女性や子供たちを中心に、彼らの命と生活を守るために、自分の身の危険も顧みず、支援し続けている。

彼女とのやりとりから伺った話は以下のとおりだ。

- * ロシア政府の問題。チェチェンで起きていることを、国際社会は認めてはいけない。事実に基づく啓蒙活動が重要。
- * アショカが開設される際に、自分から「やりたい！」と連絡し、見事GETした行動派。自分の人生を自分で切り拓く代表例。



- * 政府関係とのネットワーク連携が重要。
- * この頃、ヨーロッパの各都市でいろいろな文化交流のフェスティバルが増え、チェチェンの子供たちのダンスも人気でよく招待される。
- * ダンスの子供たちとその引率者たち、20名近くを先日も家に泊めた。彼らの日々の生活はまだまだ悲惨。しかしその中で、辛いことを忘れさせてくれるのが、ダンス。生きている喜びを感じてもらいたい。

そして、国際社会は決して見捨てていない！というメッセージをお口続けて「希望」を失わないように、支援し続ける。

ヤナ・ハラディコバ女史の思いに触れる

彼女のこれまでと、心中にある思いはどういったものか。

- * 彼女が学生の頃は、まだ大学に行ける人はごく少数。共産党の資格など入学は大変。
- * イギリスに留学していた際に、日本人の女子学生と一人仲良くなったが、日本人の知り合いは彼女のみ。
- * Gender Study をまとめた資料館がプラハにある。ヤナさん自身、戦争で被害者となる女性や子供の尊厳の確保を中心に活動している。
- * アメリカを周って、基金を集める。日本には一人しか知り合いがいないので、今回会うことに興味を持った。いつの日か、日本でチェチェンの子供たちのダンスを披露でき

たら。

* 帰りに送ってくれたバス停前の教会に横にある牛舎で、1年間自分をからっぽにするため牛の世話をするワークに従事したことを、車中で教えてくれた。(自分の中で、何もかもリセットしたい時期があったのでしょうか。。。)

まとめ～彼女の話を読まえたうえで、私たちが気づいたこと

1. CNNでは、毎日のようにヨーロッパやアジア・アフリカで起きているGenocide(大量虐殺)の番組やニュースが流れているが、これまでは、どこか遠い国のことだった。しかしいつも、こうして直接的に活動している方にお会いすると、国際情報やメディア報道への意識が変わる。「私にも何かできる」「何かしなければ」という気持ちにさせてくれる。これが大切なメッセージだと改めて感じた。
2. ヤナさんの一番上の息子さんは、いま中国に滞在している。北京オリンピックへ向けての中国カヤック競技チームの技術指導をされているそうだ。息子2人、娘2人。一番下の娘さんは、チェチェンの民族衣装を着て現れ、お友達と一緒に写真撮影。恥ずかしがり屋さん。このような、異文化との触れ合いが、私たち日本人にも小さい頃から地球(国際社会)理解のために重要だと再認識した。
3. 常に笑いながら見つめる目が印象的。「ビデオを本当にいただいていいのか？」ということを確認したとき、「あなたの目が……(秘密!）」とっている」という表現をつかった。目を通して人のことをよく見ているという印象。とても、コミュニケーション力のある懐の深い、肝っ玉のすわった女性社会活動家。
4. 危険なことや思い通りにいかないことだらけだったと思うが、彼女ならそれを乗り越え「ともかく、いま必要なこと」にフォーカスして現場で行動ができる印象。この人の言う「ソーシャル・アクティビスト」という言葉には、アンダーグラウンドな活動も含まれるので、文字通り「命」がかかっている。ロシアのジャーナリストたちが次々暗殺されている現状を身近に感じた。平和ボケした日本で、こうした緊迫感はないが、しかし確実に同じ地球上で起きていること。伝えて知ってもらうだけでも、何かの動きが生まれることを望む。
5. 日本での、チェチェンの子供たちのダンス開催、異文化コミュニケーションのイベント開催、などを仕掛けていくことを通して、チェチェンやアフガニスタンで起きていることを自分の家族に置き換えて考えてもらいたい。

～まとめとして、ヤナさんとの今後のつながりを大切に考えていきたいと思う。

< 資料編 >

- ・ BERKATのホームページ: www.berkat.cz
BERKAT(アラビア語) 神のご加護、God bless you 的な意味
- ・ 組織紹介パンフレット(2種類)
- ・ 関連ドキュメンタリービデオ
- ・ 個人アドレス: kristanka@nebesa.cz

4) 社会的問題を世界に伝えるフォト・レポーター

日本の友人からの紹介で Frantisek Vlcek 氏へコンタクト

お会いするまでに時間がかかった。まさにドラマ。お会いできたのは、明日はもうクロアチアへ、という夜の 22 時過ぎ。しかし、仕事を終えて、何とか駆けつけてくださった。食事をしながらの小一時間だったのだが、お会いできて本当によかった。

EU 在日本オフィスに勤める稲増の友人の紹介で、4 月ごろから連絡を入れていた。友人の、友人の、友人の、前の奥さんの息子さん、というとても遠く遠い関係なので、不安もあったが、日本からのメールや電話にまめにこたえてくださった。

彼のことはカメラマンで社会的活動に意欲的、ということしか知らなかった。事前に日本からも電話をするが、なにせアポ設定ができない突発仕事の多いジャーナリストなので、ともかく電話をし続けることでうまく調整していくしかない状態で出発。友人の女性社会活動家を紹介してくれる話もでたが、こちらもアポが確定していたわけではなく流動的なまま、プラハ入りした。

ヤナさんの旦那さまのお店「カフェ・ヤリホ」へよく行く Frantisek Vlcek さん。学生時代から、社会的活動はボランティアも含め、ごく自然に行っていた。大学では、ジャーナリズムを専攻。フォト・レポーターという仕事だが、基本的に「人」「社会」「世相」を写真におさめて、多くの人に伝えることが使命と思っている意識の高い方であった。

まとめ

お会いしたとき名刺交換した会社は、ちょうどやめるところで新しい会社へ移るそう。今後は、独自の写真 + 記事などを出版していければ、という気持ちもある。そしていろいろなところで出会ったジャーナリストや社会活動家たちと、少しでも社会が良くなるよう、政治や国に働き掛けていくことを続けていく。淡々と語る少し恥ずかしがり屋の Frantisek Vlcek 氏だが、その分彼の中にある深い思いを訊き出すには、時間が不足していたのが残念だった。

< 資料編 >

・ Frantisek Vlcek 氏の写真ホームページ:

<http://fotof.wz.cz/#selectedfeatures>

<http://fotof.wz.cz/portfo/>

<http://fotof.wz.cz/marso/>

・ 前職: HOSPODARSKE NOVINY 新聞 "ECONOMIA" www.economia.cz www.ihned.cz

・ 個人アドレス: fotof@centrum.cz

5) アドリア海に浮かぶ世界遺産を守る ～クロアチア・ドゥブロブニク訪問記

アドリア海の真珠

色鮮やかな蒼天、斜面を昇ってくる涼やかな風。眼下に見える古い町並みは朱色の瓦屋根で、陽射に煌く紺碧の海と合わせて一服の絵のような風景。

私たち4人を一目で魅了した景色を、「綺麗だと感じられなかった」と告げる女性に出会った。



黒髪までも美しい彼女の名前は、マーヤ・ペトロヴィッチ。早稲田大学に留学経験もある才女だ。現在、クロアチア共和国高等裁判所付日本語翻訳官の仕事をしており、今回特別に私たちにドゥブロブニクを紹介してくれた。

ドゥブロブニクの「アドリア海の真珠」と称えられるその優美な姿は、カメラのシャッターを押さずにいられない。しかしこの素晴らしい景色が、マーヤさんにとって「素晴らしい」と感じられない時期があったという。

「私がこの町に住んでいた16歳の時に、突然戦争がはじまりました」

1991年までこの国は「ユーゴスラビア」と呼ばれる1つの国家だった。それが今は、セルビア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、モンテネグロ、マケドニア、スロヴェニアの6つの共和国に分かれている。



「あの山の向こう、そこはもうボスニア・ヘルツェゴビナです。車で30分もすれば町に着く。買い物にもよく行きました。でも、ある日突然、そこから兵士たちがやってきたんです」

スルジ山から見下ろすドゥブロブニクの街と反対側に、岩肌靉々荒涼とした山並が続いている。たぶん昼間に人が歩いていたなら小さな点として判別可能な近さだろう。その距離から銃を持った兵士が現れた恐怖は、どれほどだったことか。

「“なんで？なんで？”って思っていました。だってとても仲がいい国同士だったんです。今でも、なんで？って思います。どうして戦争が起こったのかわからない」

戦争が一番激しくなった、1991年、ドゥブロブニクにいた人間には、どこにも逃げ場がなかったそうだ。というのも、海は海軍が封鎖し、陸では陸軍が街に入る道を封鎖する。そして飛

行機がやってきて爆弾を落とすのだ。彼女は、飛行機の音を聞くのが一番怖かった、と言葉を続けた。

「今日、天気がいいですね。海も、町も、綺麗。でもあの頃、そんなことに気づけなかった。きっと同じような天気の日があったと思うのです。でも綺麗だと感じる事が出来なかった」

私たちにとって、「綺麗なものは、綺麗」でした。普遍のものであり、ドゥブロブニクもそれに値する。なのに、そう感じられない日々や心、状態がある…。

平和の中にある私たちは、決して味わったことのない感覚だった。

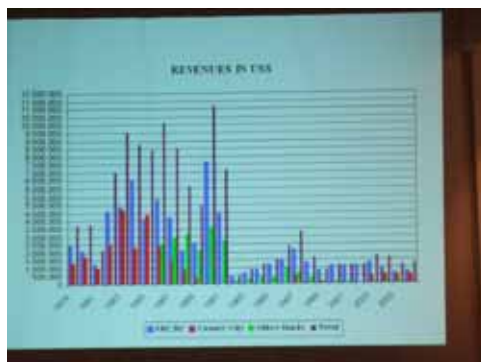
世界遺産を守る復興活動

私たちが彼女に会ったきっかけは、ドゥブロブニク修復協会の訪問にあった。先方がパワーポイントを使ってクロアチア語でプレゼンテーションしてくれるのだ。そこで、彼女に現地通訳をお願いしたのだ。

クロアチア時間 定刻より5分ほどの遅刻すること で着いた私達に壮年男性がパワーポイントを使って説明してくれた。

ドゥブロブニクは8世紀から造られています。もともと出島のような部分に家を建てたことで、現在、街の中心である大通りの下は海、つまり土台が弱いという構造的な問題がある。ましてこの辺りは地震多発地域だ。過去に二度、地震による崩壊の危機に晒されている。それを1991年までは少しずつ補強していた。

(は戦争により破壊された箇所を示す)



(復興支援金額の推移)

しかし、地震を乗り越えてきた建物が、真の崩壊の危機に晒されたのは、マールさんも恐怖に陥れた戦争だった。旧市街の殆どが被爆します。しかし、戦後、今まで以上に復興の助成金が必要にもかかわらず、寄付は激減する。

「それまで共産主義国家が、復興の支援をし

てくれました。けれど、このときを境に見向きもされなくなりました。だから今、私達の復興の支援をしているのはクロアチア国家です」

まとめ

歴史ある都市は、私達人類共通の財産である。けれど、ひとたび憎悪が生まれれば、敵国の文化は破壊の象徴になり、見向きもしない価値に成り下がる。そんな冷徹たる事実を、修復の痕に微かに残しながら、街は存在しているのだと痛感した。今回、私たちは戦争のつめ跡から平和の大切さを改めて実感するとともに、こうした事実を広く伝えていく使命を感じた。

< 資料編 >

・ 訪問先 Institute for restoration of Dubrovnik <http://www.zod.hr/>

最後に～私たちに出来ること

私たち、東欧Bチームメンバーは、今回のツアーを通じて、社会的課題に対して命を賭けて戦う戦士達と出会う事が出来た。彼らの共通点は、心の底から沸き上がるゆるぎない強い思いである。私たちは、彼らから沢山の勇気とパワーをいただくと共に、今後、たとえほんの小さな事であっても、私たちがすべき事をする使命、やりぬく使命を考えるきっかけをいただいた。

今回訪問させていただいた方々には、突然の訪問にも関わらず親身に対応していただいたお礼を込めて寄付金を送付させていただくことにした。勿論、お金だけでは解決できない問題が沢山潜んでいることは認識している。我々が今後出来ることは、こうした活動を遠く離れた日本であっても、様々なコミュニケーションチャネルを利用して発信していくこと、問題提議をしていく事だと思っている。こうした活動家の思いを伝えていくことで、少しでも日本におけるソーシャルマインドの育成に役に立てればと考えている。

忙しい時間の中、突然の訪問にも関わらず対応していただいた社会起業家の方々へ、改めてお礼を申し上げたい。